



丸善  
2,400円

## 美楽 Biraku

もつと美を楽しみたいあなた  
へ 恋心で楽しむ美学

岡林 洋 (天文学部教授) 著

〈モナ・リザ〉が傑作である理由をアタマで知っていても、その美しさを楽しめるとは限らない。美を楽しむには、未知のものに出会って恋する心が必要だから。それなしでは、美について思索する「美学」という学問も成り立つまいが、少なくとも私はその心を見失って久しかったと、著者は打ちあける。

岡林洋は現在もつとも活発に発言する美学者のひとつである。それが、話をみずからに限定してであれ、美学ではなく「美楽」を主張する。本書はまず何よりも、美学の現状に対する謙虚な、しかし明確な批判である。

毎日、会っていたのに、きよ

うのあなたは美しい。「美楽」は恋から始まる。ただし今は、恋の相手ではなく、恋する私を見つめよう。私の恋心があなたを変えたのだから。「美楽者」はなかなかエゴイストである。

恋のさなかに我をわすれるジタバタでは、岡林さんも人後に落ちなかった。相手は現代芸術。今、その経験を理論化する。いかにも恋はエゴイストによつてしか理論化できない。

恋に焦がれる私の心は、ねらった相手との一心同体を願い、姿をまね、仕草をまねる。私は私でありながら、相手でもあらうとする。その不可能事が成就しかかった瞬間、私は私を超えて、「異」なるものに打って出る。それを岡林さんは「異文化交流」という。

恋心の理論はどこまで広がるだろうか。続編があるという。岡林美楽は未完である。

上倉庸敬 (大阪大学文学部教授)



キリスト新聞社  
2,000円

## キリスト新聞で読む戦後キリスト教史

キリスト新聞社編  
原 誠 (天学神学部教授) 監修

敗戦後半世紀以上を経過し、日本社会は大きく変化した。小泉首相の靖国神社公式参拝、自衛隊の海外派兵といった状況は私たちに戦後の再考を迫っている。キリスト教界は現代の時代状況の中で何を語るのであろう。その指針を探る上で、是非、手元に置いておきたい一冊である。

「自己理解のための一助に」という監修者の期待が十分に生かされた編集となつている。半世紀以上にわたり報じられてきた莫大な情報の中から、一年あたり一項目を原則に、幅広く

種々の記事を選択された点は多様な歴史をコンパクトに捉えやすい。また、記事を一次資料として提示することに留まらず、読者を意識して記事抜粋を掲載し、記事に関する解説文を提示した点、監修者の歴史研究者としての地道な苦勞と誠実な姿勢を察することができる。歴史が常に流れ動いていることを意識し、過去と現在を繋ぐ解説があり、過去を問い、今を見つめ、将来への新たな歩みを共に探求する視座が提供されている。さらに、「この年は」の項目は、先の解説と合わせ、自らの学びを発展させることを導く。読者は自ずと歴史理解が深められ、歴史探求への刺激が与えられる。

日本のキリスト者の自己点検作業のための一つのガイドブックとして、本書をお薦めしたい。公正・迅速な情報発信の場として、『キリスト新聞』の更なる発展への期待を付言しておく。

小崎 眞 (女子大学生生活科学部助教)



成文堂  
2,800円

## 国際組織と国際関係

—地球・地域・ひと—

鷺江義勝（大学法学部助教授）

ほか編著

本書は、阪南大学の辰巳浅嗣教授と同志社大学の鷺江助教授が編者となり、同志社大学大学院法学研究科に学んだ研究者（現在、留学中、非常勤講師、専任講師）が中心となつて著した著書である。その意味で、同志社大学大学院の国際関係研究の成果が示されたものといえよう。本書の内容は、つぎのとおり。

### 序章 国際社会の諸相

第一章 国連の新たな役割の模索

第二章 G8サミットの役割

第三章 国際レジームとしてのWTO

第四章 世界銀行とNGO

第五章 国際人権と国家の自

律性

第六章 欧州の広域国際組織

としての欧州審議会

第七章 東アジアにおけるリ

ージョナル化の傾向

第八章 地域的安全保障と世

界の平和

第九章 EUによる地域統合

の試み

第十章 欧州統合の進展と地

域の役割

終章 国際組織と国家

以上のように、本書は国際的、地域的な組織をとりあげ、それがグローバル化の進む国際関係の中で、どのような機能を果たしているのか。各国の政策、ひいては主権国家そのものにどのようなインパクトを与えているのか、検討している。

各章とも、分かりやすい記述で、事実関係を整理しており、インフォーマティブな内容になっている。

大矢根 聡（大学法学部教授）



東京大学出版会  
5,800円

## オーストラリアのアイデンティティ

—文学にみるその模索と変容—  
有満保江（大学言語文化教育研究センター教授）著

一九七〇年代に多文化主義政策を定めたオーストラリアは、アングロ・ケルティック系入植民の文化に加えて、先住民の伝統文化、さらに、アジアをはじめとする新しい移住民の文化を包摂しながら、自らを模索し変容を続けている。

この状況は直ちに文学に影響する。かつては周縁におかれていた先住民の声、入植以来忘れられていた女性の声、新たな非アングロ・ケルティックの声に響く。これらの動きに、文化には複数の中心が存在する、というポスト・コロニアルの文学理論が根拠を与える。

最初の入植者がつくりだしたブッシュ伝説は様々な視点から読みかえられる。かつて正統とされたイギリスあるいはヨーロッパ文学の規範を当てはめることはできない。たとえば、七三年のノーベル賞で国際的に認知されたはずのパトリック・ホワイットの評価もまた、オーストラリアとは何か、という問いかけによって揺れている。さらには、少数派や先住民に出自を偽って登場する作家もある。現代絵画や映画にも目をくばりながら、多文化状況下の活力が、見事に描きだされている。

「混合文化」が生まれつつある状況を、著者は息をのんで見守っている。人口わずか二千万の国のアイデンティティの探求はまだ「実験段階」だが、その「未知の可能性」は、やがて、地球的な規模で実を結ばねばならぬ、という思いがあるからだ。

中井 晨（大学言語文化教育研究センター教授）

## 仕事の社会科学

—労働研究のフロンティア—

石田光男（大学文学部教授）著

本書は、「仕事」に焦点をあて、日本人の「働きぶり」の根底を明らかにしようと試みた研究として、私たち実務家をうならせる内容である。「人」の行動への規制体系として、賃金を通してのインセンティブ（経済的刺激管理）と、仕事を通してのサンクシヨ（承認欲求と羞恥心管理）とを理論化した点は特筆すべきである。日々の「働きぶり」を左右するものは、半年に一度の形式化したMBO（目標管理）や、査定を通しての刺激だけではなく、サンクシヨンの理論構成要素である「羞恥心」や「承認欲求」を組織と従業員との間に真に会話させていくか



ミネルヴァ書房  
3,500円

が重要だと明示している。これは、実務を行う上で重要な理論根拠になる。成果主義、目標管理導入により企業が集团的労使関係から個別的労使関係に軸足を移しながら、企業はこの変化を認識し得ず、集团的労使関係の中で成功してきた「しがらみ」から脱却しえないところから、経営者、従業員（労働組合）双方とも、閉塞感に悩まされている。その本質を当書は明らかにした。ただ、この理論体系の裏側にある、著者が真に我々実務家に対して警告を発しているメッセージは、従来日本企業が、人事システムの中で機能させてきた「人の評価」視点である全人格的評価に導かれる「立派な人間」の育成を決して忘れてはならぬ」ということである。「立派な人」は、リーダーシップの前提条件でもある。広く実務家が読むべき一書である。

竹内上人

（セイコーエフソン株式会社人事部課長）

## パッケージ観光論

—その英国と日本の比較研究—

玉村和彦（大学商学部教授）著

一九六四年の海外渡航自由化以降、日本人海外旅行者数が前年度を下回ったことは四十年間でほんの四度しかない。このような海外旅行市場の成長の原動力となったのが、不慣れた外国でも比較的安価で安全に旅行できるよう作られた「パッケージ・ツアー」という商品であった。近年では海外旅行市場の成熟化に伴うニーズの多様化、細分化を反映して「個人旅行」の伸びが目立つが、市場全体では依然としてパッケージ・ツアーが日本人の海外旅行の主流を占めている。

本書は、このパッケージ・ツアーを題材として日本と似た地



同文館出版  
2,800円

理的条件を持つ英国の事例と比較することによって、日本の旅行産業と日本人の観光とを考察しようとする意欲的な研究の成果である。著者は、まず日本と英国のパッケージ・ツアーは似て非なるものであるという仮説を唱え、豊富な資料を駆使し「プロダクト分析」「チャネル分析」等の様々な角度から具体的にその検証を進めていく。その内容は初めて観光研究に触れる読者にもわかりやすいように用語の解説がなされ、既に日本の海外旅行市場に詳しい読者も英国の事例との比較から新たに学ぶことが多いだろう。

旅行費用の低廉化と海外観光の大衆化に大きな役割を果たしたパッケージ・ツアーという旅行商品が今後どのように発展あるいは変容していくのか。読後にそんな問いを抱かせる良書である。本書の試みを手がかりとして、観光研究のさらなる展開が期待される。

西村幸子（ピクトリア大学

（オーストラリア）博士候補生）





現代人文社  
1,200円

## 抗う勇気

—ノーム・チョムスキー—

浅野健一 対談  
浅野健一 大学文学部教授 ほか著

ノーム・チョムスキー氏が日本でも最近注目を集めていることは周知である。アメリカの内側から、その外交政策を批判するという姿勢が、九・一一事件以後の世界情勢のなか、ひととき重要なものとみなされたからである。だが、このような方針は最近に定まったものではない。政府の抜き差しならない官僚制的呪縛に目をむけ、活動を始めたのはベトナム戦争からである。

一方、浅野健一氏は、日本における代表的ジャーナリストの一人であり、元共同通信記者、現在は本学文学部で新聞学を教

えている。専門は犯罪報道で、メディアの現状を批判するとともに、スウェーデンをはじめとするメディア責任制度を日本に紹介することで多大な貢献をなしてきた。

浅野氏は、共同通信のジャカルタ支局長だった一九九二年、スハルト政権からインドネシアを追放されるという窮地に陥った。東ティモールや西パプアにおけるインドネシア軍の人権侵害を調査報道してきたことを疎まれたのである。チョムスキー氏もまた、東ティモール問題で執筆し国連で証言するなど、七六年の武力併合以降、積極的な活動を展開していた。

両者の接点はこの始まり、国際社会における日本の責任、知識人の役割など盛んに意見交換されている。イラク戦争を踏まえたいま、この対談自体、得難い一つのジャーナリズムとして捉え直すことができよう。

河崎吉紀（大学文学部嘱託講師）



世界思想社  
2,600円

## 中国二〇世紀文学を学ぶ人のために

宇野木洋ほか編

阪口氏はパートⅡ「二〇世紀前半の小説―救国と通俗の相克―」を執筆している。中国文学の時期区分では、五四時期、三〇年代、抗戦時期にあたる。それぞれの時期の典型的な小説を引用しながら、簡潔な説明をしてくれる。

五四時期の小説は、初等教育の教材として採用されることにより、話し言葉（書き言葉から改良された）の普及に貢献したという指摘は、初学者には親切でありがたい。また三〇年代文学の代表作「子夜」は「大衆が小説を通して社会を認識（改革）

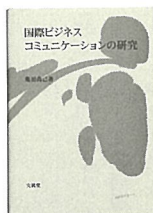
する」という課題を近代的スタイルで初めて実現した小説だと解説しているくんだり、目からウロコがおちた思いである。

しかし、阪口氏の主旨は、副題にもある通り、当時の小説史を通俗文学と非通俗文学の相克として捉えなおすことにある。時代により非通俗文学が知識人文学に偏り、教条主義に偏るにすぎないのだ。抗戦時期は、戯劇中心であるものの（救国優先）、氏は丁寧に通俗文学の掘り起こしをしている。前著の蓄積をよりどころにした指摘はきわめて説得的であり、示唆に富むといえよう。

執筆：阪口直樹（大学言語文化教育研究センター教授）

名和又介（大学言語文化教育研究

センター教授）



文眞堂  
3,000円

## 国際ビジネスコミュニケーション ニケーションの研究 亀田尚己 (大学商学部教授) 著

亀田先生にとっては、本書は、この分野の研究書として、一九九六年に全文英語で書かれた *Business Communication toward Transnationalism* (近代文芸社刊、翌年米国の学会で優秀出版賞を受賞) に次ぐ第二作目に当る。前書が出てから七年の間に、国際ビジネスを取り巻く環境は大きく変わった。

日本企業の海外進出は至極当り前となり、本邦親会社と海外子会社のタテの取引が飛躍的に

増大したのみならず、海外子会社同士のヨコの取引も増加の一途をたどり、傘下企業の従業員構成において外国人比率が日本人比率を上回る企業の出現すら珍しいことではなくなっている。こういう多国籍企業を対外的にも対内的にも円滑に運営していくにはコミュニケーションをいかにマネジするかが重要課題となる。

亀田先生は、本書において、ビジネス英語、国際経営、異文化コミュニケーションを三つの柱とし、これらをいかに有効に機能させるかについて、詳細にかつ分かりやすく論じておられる。筆者は、久しぶりに読み応えのする本を読んだという思いをもつ。この分野に興味をお持ちの方々にぜひ一読をお勧めしたい。

中村 弘 (大学名誉教授)



教文館  
1,500円

## よくわかるキリスト教@インターネット 小原克博 (大学神学部助教授)・野本真也 (大学神学部教授) 著

キリスト教を学ぶことは難しい。なぜなら、長い時間をかけて築かれてきた多様なキリスト教の世界観を知ること、客観視することなど不可能な現在におけるキリスト教の意味を見いだすことを同時に行わなければならないからだ。神学をめざす者ならいざ知らず、一般の人たちがこの壮大な世界を知ることとは意外と難しい。

しかし、本書はキリスト教を総合的に学ぶための新しい方法論を示している。インターネットの登場によってキリスト教関係者は当事者みずからの意志と責任において様々な情報を発信

していることが明らかにされている。そして、これらのサイトのURLが網羅的に掲載されており、自宅のコンピュータの中にキリスト教の過去、現在、未来のデータベースを作ることが可能になる。

「プロテスタント」「カソリック」また「ギリシャ正教」の違いはなんですか、とよく巷で聞かれることがある。簡単に答えることができる問題ではないのだから、少なくとも本書があれば、当事者たちが考える最新の見解を瞬時に比較出来ることが分かり、新鮮な驚きと喜びを感じる。

また、過去から現在までの主要な神学のテーマや神学者についても詳しい情報が掲載されており、探求意欲がかき立てられることは間違いない。

本書とインターネットが使える環境があれば、もはや神学部に行く必要がないかもしれないと思わせるほど、コンパクトではあるが内容の詰まった一冊である。

川田隆雄 (女子大学文学部助教授)



ミネルヴァ書房  
2,800円

## ミュージックセラピー

—対話のエチュード—

稲田雅美 女子大学文学部助教授 著

本書のタイトル、ミュージックセラピーという用語は、日本ではまだ聞き慣れないことばである。それは、最近耳にする「こころのケア」を実践するひとつの具体的な方法と位置づけることができる。「こころ」だけではなく、「身体」をリフレッシュする効果も生理学的に確認されているという。

穏やかな音楽を聴くと、イライラした気持ちが落ち着くとか、陽気な音楽を聴くと、落ち込んだ気持ちが軽くなるなど、私たちは、素人なりに音楽の持つ心理的な効果をよく認識している。音楽は実に不思議なものである。

著者の稲田雅美氏は、英国で学ばれたミュージックセラピーの理論と、ご本人の体験から導き出された具体的な実践方法を本書において、格調高く、かつ、わかりやすく論述されている。

一章では近代ミュージックセラピーの誕生とその発展、二章ではミュージックセラピーの目標やその方法が記述されている。続く二つの章では、リハビリテーションと発達支援のそれぞれの観点から心身のケアの問題が詳細に解説されている。さらに、五章と六章は、音楽的対話という題のもとで、主として即興音楽について、数多くの楽譜を含む豊富な資料と具体的な内容が提示されている。最後の章では、この領域の権威である英国のウィニコットの理論の紹介とともに、セラピストのあり方とセラピー音楽の芸術性についての著者の考えがまとめられている。

井上智義（大学文学部教授）



白桃書房  
2,800円

## 現代観光への アプローチ

山上 徹

（女子大学現代社会学部  
教授） ほか編著

観光は、海外旅行や国際交流、温泉地の活性化、ふれあい体験など多くの人や分野で広がりを見せている。観光はその実務がイタリアの地中海貿易の港湾・交易拠点ではじまり、また旅行業は十八世紀のトーマス・クックを起源とし、それから二世紀余を経過した。しかし学問としては、経済学や法学などに比べてまだ発展途上の段階にある。観光の実態とは何か、観光をどう考察すべきか、地域住民からも観光は何のために必要なのか、など問いかけが未だに続いており、明確な説明がなされ

てきたとはいえない。観光学が広範で流動的な社会現象を扱っていることにその一因がある。

本書は、このような特性を持つ観光が今日抱えている研究課題（十五の基本テーマ）について、新進気鋭の若手研究者が分担執筆したものである。事例研究を基本に問題認識と多面的な考察が行われており、多くの示唆を含み、また観光事象のもつ多様な要素・機能を改めて教えられる高書である。とくに観光の実態・データに基づき、科学的にアプローチしようとする真摯な研究姿勢が伺える。それは上梓の契機にもなった山上徹先生の教えや指導を反映したものであり、信頼性の高い観光研究の成果であり、多くの人々の購読を望みたい。あわせて、執筆された若手研究者の今後の活躍と、このような蓄積により観光学が一層成熟することを期待したい。

執筆・河野健男（女子大学現代社会学部教授）

中嶋 茂（桜美林大学教授）



## 華

メディア・エンターテインメントの世界  
影山貴彦 (女子大学文学部助教授) 著



世界思想社  
1,200円

毎日、多くの新刊が職場に送られてくる。面白そうな一冊を探す時間は、なかなか仕事とは言い難い楽しさだ。そうやって手にとったこの本、冒頭を一読してかなり驚いた。「おそらく、結論は出ないことだろう」とあっさり書いてあるではないか。だが、「結論のないところこそさまよってみるのも悪くない」という、続く一文に押されて読み始めると、たちまち興味深いその視点に唸ってしまった。

本書の「華」とは、「あの人は華がある」という場合のそれである。著者はまず山口百恵、長島茂雄、高倉健ら、世代も分野も違う「華ある人々」を取り

上げ、インタビュアーや自伝、自身の毎日放送社員時代の思い出などを交えながら、彼らがなぜ人々の心を捉えるのかについて考察する。二章ではさらにその共通項を整理して示すが、「全面的な好意は加速度的に飽きることにつながる。華にはごくわずかな引っかけが必要」など、鋭い指摘ばかりだ。なるほど、結論が求められるようなテーマではないが、「華」という視点で見直すと、世の中はぐんと面白くなることは確かであろうだ。

「君には華がある」というのは褒め言葉として最上の部類だろうし、「お前は華がない」と言われてしまえばなかなか立ち直れそうにない。それは「華」が数字では計れず、意図的に作り出すこともできない、努力を超えたものだからである。誰かになぜか惹かれてしまう、という現象の不思議さに、改めて思いが至る一冊である。

藤井泰介 読売新聞大阪本社文化部記者

## Neesima Room企画展

## 新島襄「脱国140年」記念 「函館からボストンへ」展

新島襄が鎖国時代の日本を飛び出し、アメリカをめざして函館から「脱国」したのは、幕末の1864年のことでした。今回、新島の「脱国140年」を記念して、「新島遺品庫」収蔵品の中から関係する当時の貴重な一次資料を公開いたします。あわせて函館からボストンまでの1年間にも及んだ船旅や、乗船した船、「脱国」の協力者、各地の消息などの関連資料を展示いたします。新島が抱いた「脱国の志」の一端に触れていただければ幸いです。



新島の脱国衣装。アーモスト大学に在学中、級友の求めに応じて再現したもの。

〈期 間〉2004年4月1日(木)～2004年8月31日(火)

〈時 間〉9:30～17:00 (土曜日は16:00まで、日曜日は10:00から、8月の平日は16:00まで)

〈会 場〉Neesima Room (同志社大学今出川キャンパス・ハリス理化学館2階)

〈閉室日〉祝日、4月29日～5月5日、8月16～20日、8月の土・日

〈入場料〉無料 (事前申し込み不要)

〈お問い合わせ先〉同志社社史資料室 Tel. 075-251-3042 E-mail: ji-shasi@mail.doshisha.ac.jp